

家族の体験発表①

不登校の親としての一年間、旅立ちまで

E.F. 氏 (保護者)

昨年2月、学年末テストを控えたタイミングで突然娘が「学校へは行きたくない」と大泣きしながら訴えだしたのが始まりでした。何故「行けないのか?」と問いかけても「怖い」「自分が悪い」「死んでしまいたい」等々自己否定的な言葉が並び、『何故、こんな精神状態になるまで気づいてあげられなかったのか?』と私自身も自分を責めました。しかし私が自分を責めるのは後でもできます。まずは娘が学年末試験を突破し無事最終学年になる事、そして1年間学校に通い単位を取得し、各定期テスト、卒業試験、国家試験に臨むことが私の課題となりました。学校の協力を得られたことで学年末テストはなんとか突破し、最終学年になることは出来ました。学校の先生からは休学を勧められてしまい、益々「学校に行きたくない」「怖い」との思いは強くなるばかり、自己否定の言葉も増えていた為春休みに入ったタイミングで内観療法を受けさせたく、太田病院に入院させました。10日間程入院し、内観療法、退院直前の家族内観を行った娘の表情には笑顔も見られるようになり、新学期からは学校に通う『意思』が芽生えていました。4月から学校へは毎日私が送り迎えをして通い始めましたが、新学期開始早々から体の震えや硬直、強い吐き気や頭痛、過呼吸等の症状が現れるようになり「こんな思いまでして何故学校に行かなくてはならないのか?」苦しみながら通う毎日でした。そんな日々をすごしている中、ゴールデンウィーク明けに、学校で一番親しくしていた友人からの絶縁宣言を受けてしまい、各症状が強くなったのと共に水すら嘔吐し全く栄養がとれない状態が一週間ほど続いてしまい「緊急」という形で再入院しました。これまでなんとか学校へ「行こう」と思わせていた精神的な支柱が崩れてしまって居たことは明らかでした。「退学しかないだろう」と夫と覚悟した程です。しかし娘は入院してすぐ次の日から病院から学校へ向かいました。震えながら車に乗り、学校へ向かう姿はその場で倒れてしまうのではないかと想像させるほど衰弱していました。その後も各症状は強く現れ早退する事も頻繁にありましたが、入院生活の中にある人間関係や日々の日課、職員さんとの関わりの中で体調面での心配は無くなり1ヵ月半ほどで退院に至りました。娘が大田病院に通院するようになって気づき、私がお手本にしたのは、関わって下さった病院スタッフ皆さんの「褒める」という行為でした。『褒める』これまで意識的に他者に対して褒め言葉を使ったことの無かった私は、褒められた時の喜び、褒められた時の安心感、褒められた時の幸福感等の感情を強く受けられることを始めて知りました。又『褒める』と言う行為や言葉には相手への理解、共感、尊敬の念が含まれていると理解出来ました。「話を聞き、受け入れ、褒める」その繰り返しの一年でしたが、その過程で娘は少しずつ「自信」を取り戻し、その自信は徐々に諸症状を抑え、自立した通学、勉強への努力、学校内での友との関わりへと繋がり、今年の春には無事卒業し国家試験合格に至りました。この1年間何度「学校を辞めて良いよ」と心で叫んだか知れませんが。しかしその言葉を飲み込んで背中を押し続けることが出来たのは本人が一度も「今日は学校を休む」と決定しなかったからです。本人の意思なくして回りが物理的、精神的に支えようとしても何事も前には進みません。太田病院と出会い治療を受け努力し続けた娘、この1年間、娘はこれまでの人生の中で一番苦しい日々を乗り越えることができました。